

の傑作を味読するとともに、ありし日の堀田先生の清高至醇なおもかげを偲ぶよすがとしたい」。堀田は東京外語の卒業式の謝辞の中でも「鐘の歌」の一節を引用したが、余程この詩が気に入っていたらしい。元来この詩は明治20年前後にアドルフ・グロートやエミール・ハウスクネヒトなどの独人教師が独語の教材に用いて以来、明治の青年達に感銘を与えたものだった。だが、堀田が訳した昭和期には以前ほどの感激は見られず、むしろドイツ文学の古典の紹介という点にその意義が認められる。最後に『七高思出集』（前・後篇）から同僚や教え子の証言を引用しよう。

小池秋草「独逸語の堀田正次さんは其頃外語出というので謙遜して居られ、又オット文典一点張という観があった。」小池は東大独文科卒の文学士。堀田より1年遅れて明治36年に七高に赴任した。オットー文典は英文で書かれたドイツ会話文法教科書で明治中・後期に広く用いられた。

鵜飼敏文（明44・独法）「堀田先生は胸の病気をしておられ一生独身で通されたそうであるが、生徒に対する教授方法が親切で真面目で謹厳なる先生であった。独逸語の時間が終わってから質問の為、先生の面前に立つと先生は自分の病気を気にしておられるせいか、生徒が近よると必ず三尺位あとさがりして一定の距離を保って生徒に親切に答えて下さったように記憶している。実にゆかしい先生であられた。」

上村行徳（大15・文乙）「堀田先生はどういう事情か独身生活をされ、上荒田町方面に住んでおられた。先生の気品のある顔には何となく孤独の寂しい影が宿されていたような気がする。（中略）堀田先生はあの頃シラーの『群盗』を翻訳された。後年私自身シラーの研究に着手するようになったのも先生の影響が私の心の中に潜在意識として残っていたからであろう。私は寂しく独居しておられた先生の私宅へギターを持って行って演奏して、先生をお慰め申し上げたこともあった。夏には天保山の海水浴場で先生に時々お会いした。七高を去れてから後に逝去された先生のあの一抔の寂しさの影を宿した温顔を今は仰ぐよすがもないことは真に残念に堪えない。」

## 片山孤村『都会文明 伯林』

七高造士館教授を振り出しに、二高、三高を経て、最後は九州帝大初代独文科教授を務め、また特に独語辞典の編纂で知られた片山孤村（正雄）の留学成果に『都会文明 伯林』（博文館、大正2年）という本がある。菊判、本文202頁。その特色は、多くの口絵写真と、地図を挿入しながら、「文明の画図」としてのベルリンの実体を客観的に描き出すことによって、一種の都市論を展開した点にある。明治時代にベルリンほど多くの日本人が留学した都市は他にないが、まだベルリンの都市の実体を把握した日本人は少なかった。なるほど森鷗外は小説『舞姫』（明治23年）においてベルリンを舞台にし、その都市の表と裏をも描き、また巖谷小波も『洋行土産』（同36年）でベルリンにおける日独の交流や名所について興味深く綴ったが、都市論と言えるものではなかった。その後数年を経て郷土芸術論への言及を行い、またベルリンの徹底

自然主義の詩人アルノ・ホルツを紹介していた片山孤村の手で、「伯林」がまとめられた意味は大きい。

ところで周知のように、現在ベルリンは統一ドイツの新首都として、その将来像を含めて世界の関心を集めている。筆者自身もこの夏一カ月（1999）そこに滞在して、現地の様々な動きをつぶさに見てきた。それだけに孤村のこの本には大変興味を覚え、一気に呵成に読了した。

さて「序」によれば、著者2カ年のドイツ留学中「欧州に於ける第二の故郷」となったベルリンでの生活は独身の貧乏生活であったが、日本に帰ってみると、「憂しと見し世ぞ今は恋しく、伯林に於ける生活が真の生活、充実したる生活のやうに思はれて、事毎に貧弱な日本の文明と貧弱な我れ自らの生活が厭はしく、伯林を慕ふの情凝って」、この書となったのである。

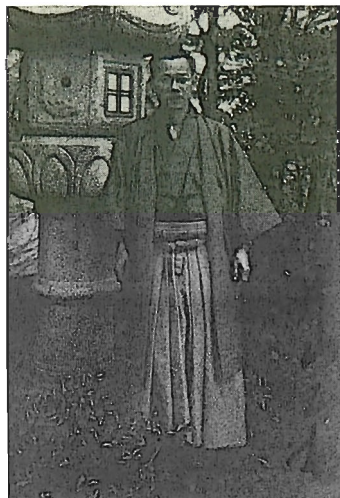
「まだ日本には都会らしい都会が無い、日本式都会は滅びむとして近代的、西洋式都会はまだ出来上らない。あらゆる欠点と暗面とを具へた都会はあるけれども、開化した人間が定住し、安んじてその生命財産を托するに足り、而して随時にその精神的生活を豊富にする諸機関を具へた都会はまだ一つもない。（中略）この際に当って欧州の大都会の文明を描いて之を邦人に伝へ、近代的大都会とは如何なるものなるか、其外形と内容とを知らしめるのも徒爾ではあるまい。殊に都市経営に確乎たる大方針なく、また悪しき意味の実用に偏し、都市の美観につきては全然盲目なる現代の日本にはこの事の切に必要なことを感ぜずには居られない。」

筆者は、約90年前に書かれた孤村の言葉は現在の日本の都市にも当てはまることに愕然とした。同時に真正面からの発言に感銘も覚えた。

第一章の「伯林の特色」の小見出し「都市と文明」「都市の定義」「独逸に於ける大都市殊に伯林の発展」「伯林の特色」「近代的」「家庭」「その構造」「市街」「広場」「道路の清掃法」「市街の風致と広告」「市街外観の単調」「独逸帝国と伯林」を一瞥すれば、孤村の意図は明瞭に読みとれよう。

続く「伯林の歴史及現勢一般」「伯林の大観」「古伯林」「フリードリヒの伯林」「ティーアガルテン」「学生区及労働者区」「伯林西区」「伯林の郊外」各章も、市区ごとに歴史や特色を伝えてそれぞれに興味がある。例えば「伯林の郊外」の冒頭には次のような描写がある。

「伯林の郊外は伯林と同じく砂又砂の平野であるが、湖沼森林に富み、一日の散策に値する地方が少ない。併し森林は黒く、暗く、湖沼は濁り、河川は停滞し、空気澄明ならず、此辺一帯の風光は陰鬱悵愁の趣が勝って明媚と云ふ形容詞を与へることは出来ないけれども、これがマルク地方風景の特色で、また捨て難い趣味がある。又さすがに大都会の附近であるから汽車は



片山孤村（正雄）

都會文明  
乃畫圖

伯  
林



東京  
博文館  
蔵版

文學士  
片山孤村  
著

四通八達であるし、道路もよく、深林でも掃除が行届き、道しるべが立て、あるし、湖水には汽船の便があるし、到处廉価な料理店やカフェが設けてあって休憩にも事を欠かず、便利で気持がよく出るに億劫でない。」

グリュエネワルトを散策し、そこのトイフェル湖で泳ぎ、また孔雀島に遊んだ体験を持つ筆者も、孤村と同様な思いがある。よく郊外の様子が描かれている。

特に興味があるのは「伯林大学」「伯林の美術館」「伯林の劇場」「伯林の新聞雑誌」の章が設けてあることだ。「伯林大学」の冒頭には「独逸には総合大学（Universität）の数、近々開始せらるべきハムブルク及フランクフルト（ライン河畔）の両大学を合すれば二十三にのぼり、教授講師の数三千五百余人、学生数約六万、聴講生を合すれば十万にも及ぶだらう」とあり、伯林大学（現フンボルト大学）は総合大学中起源が比較的新しいが、文明史上、教育史上非常に興味があるとして、創立の経緯と変遷が詳述されている。そして結論的にこう要約している。

「千八百九年八月の勅令に於ける国王の語に依れば、伯林大学は、『各専門の第一級の人物を聘用する』を主義としてゐるだけあって、過去一世紀間に於ける教授中には独逸学術界の偉人を網羅せる感がある。現今に於てもさうである。従って卒業試験も程度高く、年々<sup>ドクトル</sup>学士を出すこと僅に数名に過ぎない有様である。

大学の行政は正教授中より選挙された任期一年の総長及大学法官の二人之を統轄し、他は<sup>セナート</sup>教授会が<sup>セナート</sup>あって諮詢に応じてゐる。

学生の風俗は他の小大学市と趣を異にし、其所在地に特徴を与へる程の異彩はない。小大学市は学生が主権者の如き地位にあって、其地の人は学生の為めに生活してゐやうな有様で休暇中には市は殆んど空虚になるが、伯林は大都会であるから、学生は殆んど物の数でない。従って学生は其風俗及習慣に於て殊更に他の俗人と色を異にするもの少く、多くは勉強一方である。伯林大学は労働大学（Arbeitsuniversität）である。」

これが他の大学の模範とされた頃のベルリン大学の姿である。

「伯林の美術館」の章では、ベルリンでは何でも新しく美術館の整頓も最近のことで、パリやロンドン、或いはドイツ国内のドレスデン、ミュンヘンなどと比べると遜色があるかも知れないが、「フリードリヒ帝記念博物館」（ポーデ博物館）はベルリン第一の博物館だとして収蔵品の特色を紹介し、陳列法の斬新なことを述べる。

「多くの陳列室が単に同一時代、同一派、同一種類、又は同一作家の作品を集めたる単純なる博物館式陳列室たるに止まらず、同一時代の絵画、彫刻、工芸品及建築の或部分を同時に配置して該時代の美術全般を概観することの出来るやうにしてある事である。この装飾的陳列法は各室に活気と趣味とを与へるものであるが、その創意者ポーデ氏は之が為めに博物館の特質を害し、主なる陳列品に対する注意を散漫ならしめる弊に陥らざらむことを努めた。」

そしてこの新案はなお改善の余地はあるが、この新機軸によって、該博物館は他の欧州の諸博物館に一頭地を抜いたという。また、当時はまだ新博物館に収められていたベルガモン祭壇については、ベルリンにある古代美術の最高且つ最大のもので祭壇の四面を飾る「ギガンテンの戦」は、大英博物館にあるパルテノン神殿の彫刻にも劣らない世界的価値のある逸品と書いている。ちなみに、現在、博物館・美術館が80あるベルリン（1992年刊ベテツカーによる）は、美術都市としてはドイツ最大であり、パリやロンドンに劣らない。

「伯林の劇場」の章では、劇場の数は19世紀初頭では3、60年代には9、それが70年代に入ると18、当今では約40と、劇場の数が増加して、ベルリンはドイツ演劇界の中心になったが、近時は小歌劇と活動写真の勃興のために影響を受け、二流の劇場には倒産するものも少なくないと言語。だが、「劇場の維持は中々困難であるけれども、流石は大都会である、俗衆を念頭に置かず、芸術を本意とした新しい試みが絶えず行はれ、また相当に成功を博してゐる」という指摘は、この都市がその後、前衛劇の一大中心地であったことを想起させ、興味深い。そのほか「マイニンゲン劇団」「独逸座」を経て、「自由舞台」の出現によってイプセン、ハウプトマン、ゾーデルマンの作品が持てはやされるに至った経緯、さらにオットー・プラーム、次いでマックス・ラインハルトが「独逸座」の舞台監督になってから同座は勿論、ベルリンの劇界は未曾有の活気を呈するようになったという。

「伯林は劇場が多いのと、新しい演出法の研究が盛な為、劇場季節即ち九月より翌年五月までには有らゆる芝居を見ることが出来る。独逸古来の名作は勿論、シェークスピアの如きは英国よりも盛んに演ぜられてゐる。その他イプセンでもワイルドでもショウでもマーテルリンクでも伯林に来れば何時でも見る事が出来る」という指摘は、当時の日本の演劇関係者やファンを刺激し、胸を熱くしたことだろう。

「伯林の新聞雑誌」の章では、『未来』『独逸評論』『新評論』などの雑誌、『ローカル・アンツアイガー』『ベルリーネル・ターゲブラット』などの様々な諸新聞の主義、特色が伝えている。例えばベルリン最古のVossische Zeitungについては「千七百四年の創刊。実際の名は『国王より特許されたる政治及学事に関する伯林の新聞』と云ふ長たらしい名である。大学教授間に多くの寄書家を持つてゐるので一に教授新聞といひ、古いところよりまた『フォツス叔母さん』の渾名がある。地味で上品、而も記事の豊富な新聞である。日曜の文学附録は堂々たるものである」といった具合だ。

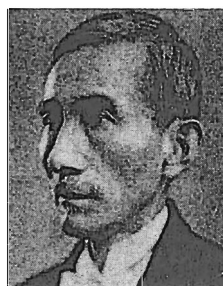
「伯林の店は午後八時に早や締められる。大抵の市街は昼は賑かでもその後は電車の軋る音と疾駆する自動車の震動との外には殆んど何の音も聞えぬ。たゞ街燈の光が月を欺いて煌々たる許りである。併しこの静かな市区を去ってポツダム町よりライプツィヒ町に出てフリードリヒ町へ向って奥深く進むに従ひ、夜の深け行くと共に繁華の度が加はる。店は締めてあるが、綺羅びやかな飾窓に照り返す光、中天に吊した一列の孤光燈、消えては光る広告の電光飾、これら幾万とも知れぬ燈火と、両側の大廈高樓の玻璃窓の反映とは茲に焰の海を現出し、アスファルトの上は昼よりも眩しい。」

という「夜の伯林」の描写、或いは新興都市ベルリン市民の意気盛んな様子を述べたり、「元来フリードリヒ町は醜業は警察令で禁止してあるに係はず、伯林市中で如何はしい女性が一番多く通るところは此町で、巡査も見て見ぬ振り。恐らく制し切れぬ為であらう」というような観察まで見られる。また「伯林人の特性は剛健、精悍、勤勉、節儉、秩序の尊重、穎利なる悟性等」だとし、それぞれ具体例を挙げている。ベルリン人の中には世界に例を見ないほど大発展をとげた自分たちの都会を愛し、これを誇るあまり、他の地方や人民を蔑視する慢心者、いわゆるスノブもいるが、中流の人々は昔に変わらず質朴で、儉約で成り上がりの風は決してない、という。またこうも言っている。ベルリン人は古来口が悪いことで名高い。しかし口が悪いほど人は悪くない。気をつけてやろう、教えてやろうという親切心も混じっている、と。

『伯林』は留学中の手記をもとに、新聞、雑誌、図書十数種を参考にして成ったものである。それで独創性は少ないかも知れないが、我が国最初のベルリン都市論を短時日のうちに、しかも多くの写真とともに、興味深くまとめ上げた先駆性と、著者のアイデアと筆力は評価できる。今、新首都となったベルリンに関する雑誌や図書が相次いで出版されているが、そうした新刊書の後にこの古書を読むと、独特の興味を覚える。

## 武藤長蔵とシラー

長崎高商（現・長崎大学経済学部）教授で日欧交渉史の研究家として特異な存在だった武藤長蔵（1881-1942）のことを、かつて小泉信三は「篤学者耽学者武藤長蔵博士」と呼んだ。確かに彼の主著『日英交通史之研究』（初版・昭和12年）や死後に出版された『対外交通史論』（昭和18年）を読んだ人ならきっと同様の印象を受けることだろう。資料の博搜と厳密な考証による文献主義的研究には篤学者として面目躍如たるものがあり、それに対しては尊敬しながらも、一面過度と思えるほどの資料の引用・注釈には、研究価値の軽重先後を無視した、煩瑣主義を感じ取る向きもあるだろう。だが、その両面が相まって彼の学風となっているのである。そして、それを支えたのが彼の蒐集した膨大な図書・資料であった。和漢・洋書合わせて一万冊を越えるそれらの図書は、現在武藤文庫として長崎大学付属図書館に保存されている。武藤文庫目録を見ると、その収書範囲は広く人文・社会科学の各方面に及んでいる。特に大半を占める洋書には交通・経済・地理・歴史・旅行記等を中心として貴重なものが多い。



武藤長蔵

さて武藤はその蔵書にも反映しているが、ドイツ文学、なかでもシラー（明治・大正期にはシルレルと表記するのが普通だった。）を愛好し、崇拝していた。ゲーテと並称されるシラーは明治前期にはその『ヴィルヘルム・テル』が自由民権思想との関連で翻訳紹介され、後期には理想主義文学のシンボルの如く文学者のみならず、知的エリート層に広く持てはやされた。武藤は明治36年（1903）に東京高等商業学校（現・一橋大学）を卒業したが、在学中ドイツ語の時間にシラーの作品に触れたと推定される。確かなのは明治38年に『帝国文学臨時増刊第二』として出された「シルレル記念号」にしばしば言及していることだ。これには巻末に詳細な参考文献が付いており、それを武藤は図書購入に際して参考にした節がある。武藤文庫目録には外に佐藤芝峰訳『ヴィルヘルム・テル』（明治38年）や秋元廬風著『シルレル研究一鐘の歌評釈』（同40年）等も見られる。だが、彼のシラー熱はやはり独逸留学時代に一層高まったと見てよからう。

武藤は大正11年3月号『学燈』（丸善）に「シルレル研究参考書雑考」という短いが、彼の特色がよく現れた文章を寄稿している。シラーは1805年（文化2）5月9日にワイマールで亡くなったが、武藤は冒頭で「私は独逸留学中も帰朝後も毎年この日に特に此偉大なる独逸の詩人を憶ふものである。本年は日独開戦の際独逸に残して置いた私の荷物が無事に着し其中に色々シルレルに関し私が彼地にて蒐集したる資料を発見しうた転感慨に耐へない」と述べている。武藤